

氏 名	東山 洸雅
学位の種類	博士(音楽)
学位記番号	甲第24号
学位授与年月日	平成30年3月23日
論文題目	コンサートレビューの分析による「ピアニスト」マックス・レーガーの演奏スタイル研究
学位論文等審査委員	
<リサイタル審査>	
主 査	教 授 阿部 裕之
副 査	教 授 砂原 悟
副 査	講 師 池上 健一郎
<論文審査>	
主 査	教 授 阿部 裕之
副 査	教 授 砂原 悟
副 査	講 師 池上 健一郎

# 論文要旨

本論文はマックス・レーガー Max Reger (1873-1916) がピアニストとして出演したコンサートレビューの分析を主な手法として、彼のピアノ演奏スタイルがどのようなものであったのか明らかにし、今日演奏の機会に恵まれているとは言い難いレーガーのピアノ作品、そしてピアノを含む室内楽や歌曲全般の適切で効果的な演奏解釈や、作品に対するより深い洞察を得ることを目的としている。

本論は4章から成る。

まず第1章では、レーガーの生涯をごく簡単に概観する。

第2章では彼がピアノのために残した主な作品について述べる。彼のピアノ独奏曲は大半がロマン派の小品集をモデルとしており、それ以外の作品も形式の点でバロック、古典派の伝統に則っているものが大多数である。しかし、特に中期の作品で頻繁に見られる大胆な和声進行や、後期の作品に表れている新古典主義の傾向などには、レーガーの作曲家としての革新性が表れている。また、ピアノを含む室内楽曲や歌曲など、彼がピアニストとして自作自演を行っていた主なジャンルの作品にも目を向け、その全体像と特徴を描き出す。第2章の内容は、彼の有名なオルガン曲や弦楽器のための無伴奏作品の陰に隠れがちなこれらの作品の普及を促すという点でも、一定の成果を上げるだろう。

第3章第1節では、レーガーの音楽教育歴を概観する。彼の音楽教育は両親による熱心な指導から始まった。また、オルガニストでもあったアダルベルト・リントナー Adalbert Lindner (1860-1946)、そして音楽学者フーゴー・リーマン Hugo Riemann (1849-1919) の指導は、レーガーの演奏スタイルに大きな影響を及ぼしたと考えられる。続く第2節ではレーガーの年代ごとのコンサートへの出演回数や主なレパートリー、そして演奏活動の理念について述べる。レーガーは作曲家、オルガニスト、指揮者としても活動したが、ピアニストとして最も多く舞台に上り、ドイツ国内外で精力的な演奏活動を行った。

とりわけ重要なレパートリーはバッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750) とブラームス Johannes Brahms (1833-1897) の作品、そして自作であった。創作や演奏会のマネージメントに忙殺されながらも演奏活動を続けたレーガーは、音楽家としての自分自身の宣伝、音楽文化の振興、そして自作の演奏解釈の伝統を打ち立てるという理念に突き動かされていたと考えられる。

第4章ではコンサートレビューの分析を中心に、レーガーの演奏スタイルについて演奏家の視点から考察する。多数のレビューが一貫して描き出している具体的な特徴を探るとともに、共演者の証言、楽譜に見られる演奏上の指示、ピアノロールの録音なども参照する。本研究によって明らかになったレーガーの演奏の主な特徴は、以下の通りである。

## (1) 全般的な特徴について (第2節)

- ・形式や構成の明確さ
- ・対位法演奏の巧みさ
- ・明確で表現豊かなフレージング

## (2) タッチについて (第3節)

- ・際立った柔らかさ
- ・オルガンやピアノ以外の楽器を思わせるような、音色の多彩さ
- ・陰影やニュアンスづけの精妙さ
- ・持続力のある音
- ・ピアノを歌わせるような音

## (3) ダイナミクスについて (第4節)

- ・ 極端なピアノッシモの頻繁な使用
- ・ 室内楽や歌曲の伴奏での控えめな音量
- ・ 中音量以下でのダイナミクスの繊細なコントロール

#### (4) テンポとリズムについて (第 5 節)

- ・ 比較的遅いテンポ設定
- ・ 遅いテンポでの曲の開始と、その後の加速
- ・ 曲中の急なテンポの変化
- ・ 自作の演奏指示とは矛盾するテンポ
- ・ 鋭さを欠くリズム
- ・ ルバートの多用

#### (5) バッハの演奏解釈について (第 6 節)

- ・ 感情表現豊かなバッハ解釈

ピアニスト・レーガーは柔らかく感情豊かに歌うような演奏スタイルを持っていた。彼の演奏は特に多彩な音色や極端なピアノッシモなどの点で特徴的であるが、概して後期ロマン派時代の一般的なスタイルから大きく逸脱するものではなく、その後 20 世紀を通して々に主流になっていく「楽譜に忠実な」演奏を理想とする近代的な演奏スタイルとは方向を異にしていると言える。

上に列挙した諸特徴はレーガーが求めていた響きや、演奏によって示そうとしていた自作の解釈を反映しているため、彼の作品を解釈するための手がかりとして大きな意義を持っている。レーガーのピアノ演奏スタイルを知ることは、複雑で難解とされる彼の作品を理解し、その魅力を発揮させるための重要な鍵である。

# 審 査 結 果 の 要 旨

## ＜リサイタル審査＞

このリサイタルは、2017 年 12 月 19 日（火）18 時 00 分～20 時 00 分の間、本学講堂にて下記のプログラム・内容で行われた。

### プログラム

- |  |
|--|
| J. ブラームス：ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ Op. 24  |
| J. Brahms: Variationen und Fuge über ein Thema von G. F. Händel Op. 24   |
| A. スクリャービン：ピアノソナタ第 5 番 Op. 53  |
| A. Scriabin: Klaviersonate Nr. 5 Op. 53  |
| W. A. モーツァルト：グルックの《メッカの巡礼》のアリエッタ〈我らの愚民が思うには〉による 10 の変奏曲 KV455  |
| W. A. Mozart: Zehn Variationen über die Arie „Unser dummer Pöbel meint“ aus dem Singspiel „Die Pilgrime vom Mekka“ von Christoph Willibald Gluck KV455 |
| M. レーガー：モーツァルトの主題による変奏曲とフーガ Op. 132a※  |
| M. Reger: Variationen und Fuge über ein Thema von Mozart Op. 132a  |
| ※第 2 ピアノ：若井亜妃子   |

## ＜審査方法＞

受審者により、約 2 時間（15 分休憩含む）の博士課程学位申請リサイタルが講堂にて行われた。そのあと、審査員 3 名が意見を述べ、約 10 分にわたり審議及び可否判定を行った。

## ＜審査内容＞

リサイタル前半は J. ブラームスの「ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ」作品 24 と A. スクリャービンのピアノソナタ第 5 番作品 53 が演奏された。

後半では W. A. モーツァルトの「グルック《メッカの巡礼》のアリエッタ〈我らの愚民が思うには〉による 10 の変奏曲」KV455 と M. レーガーの「モーツァルトの主題による変奏曲とフーガ」作品 132a が演奏された。

J. ブラームスの「ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ」作品 24 では古典的な主題を確固たる技術と表現力で演奏していたが、フーガでは声部の重なりや響きにもう少し重厚さが加味されると良いとの指摘を受けた。また A. スクリャービンのピアノソナタ第 5 番作品 53 では非常に技巧的な曲にもかかわらず安定した演奏と大胆な表現がされており本人の持っている能力の高さを示したものであった。ただし、より一層の音色や響きのコントロールを期待する意見も出された。

後半は、本人の研究テーマであるレーガーの作品への導入として、W. A. モーツァルト「グルック《メッカの巡礼》のアリエッタ〈我らの愚民が思うには〉による 10 の変奏曲」KV455 が演奏されたが、ともすれば冗長になりやすいこの作品をしっかりとした様式感と集中力で確実に演奏していた。プログラム最後の M. レーガー「モーツァルトの主題による変奏曲とフーガ」作品 132a は、2 台ピアノの作品であるが、古典的の指向を見せながらもレーガーらしい個性を持った作品である。本論文で研究されたレーガーの演奏の特徴が随所に生かされ、優れたアンサンブルと共に説得力のある演奏であった。

全体としては、いずれの演奏もきわめて質の高い完成されたものであり、博士学位申請リサイタルとしてふさわしい内容であるとの認識の元、全員一致で合格と判定された。

## <論文審査>

### <審査方法>

公開発表会では、受審者が約 55 分にわたって博士論文の内容とその学術的意義について説明した後、約 15 分間、会場との質疑応答を行った。続いて、約 1 時間にわたって審査員 3 名による論文審査および関連分野についての口述試験が行われた。その後、本人退席のうえで審査員による審査および合否判定がなされた。

### <審査内容>

本論文は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて活躍したドイツの作曲家マックス・レーガーのピアニストとしての活動および演奏スタイルの特徴を明らかにしようとするものである。

レーガーは、生前から特にオルガンのための作品で広く知られており、こんにちでも主にオルガン曲によって作曲家像が語られがちだが、実際には生涯にわたってピアノ独奏曲やピアノを含む種々のジャンルを手掛けている。また、第 3 章において詳述されるように、レーガーの音楽活動全般の中で、コンサート・ピアニストとしての活動は特に大きな比重を占めていた。それにもかかわらず、ピアニストとしてのレーガーに着目した研究はこれまでほとんどなされていない。本論文は、レーガーの知られざる側面に光を当て、そのピアノ作品の解釈に対する一つの指針を与えようとする試みである。

レーガーは、特に日本においては広く認知されているとはいいがたいため、第 1 章ではまずその生涯を、彼が居住していた都市にしたがって 7 つの時期に区分し略述している。続く第 2 章では、レーガーのピアノ作品全般に見られる様式的特徴とその変遷が論じられる。著者は、ピアノを含む独奏曲や連弾または 4 手のための作品に加え、ピアノを含む室内楽曲やピアノ伴奏を持つ歌曲も概観したうえで、その作曲様式が全体的には 19 世紀前半に由来するロマン主義的な小品（キャラクター・ピース）を主軸としつつ、バロック時代や古典派時代の要素も随所に取り込んだものであるとする。とはいえ、特に中期においては大胆な和声進行や複雑なテクスチュアへの傾向が顕著となり、後期になると一転して新古典主義的な書法も見られるなど、音楽史の潮流に応じて作曲様式が変遷している点も、譜例を交えて的確に論じられている。

第 3 章の前半では、まずレーガーの音楽教育歴が扱われ、青年期に受けたアダルベルト・リントナーによるレッスンや、音楽理論の大家フーゴー・リーマンのもとでの教育が、レーガーの演奏スタイルに決定的な影響を及ぼした点が指摘される。章の後半では、レーガーのピアニストとしての活動およびその理念について論じられる。著者は、こんにち残されている演奏会への出演記録を体系的に調査し、1) レーガーの演奏会出演のピークが 1910 年から 1914 年にかけてのマイニンゲン宮廷楽長時代であること、2) オルガニストや指揮者としてよりも、ピアニストとしての出演回数が圧倒的に多いという事実、3) 独奏曲を披露するよりも、むしろ室内楽の一員として、あるいは歌曲の伴奏者として舞台に立つのを好んでいたこと、4) 演奏レパートリーの多くは自作であるものの、J. S. バッハの作品の演奏にも少なからぬ比重が割かれていたことを明らかにしている。さらに、レーガーの書簡や発言をもとに、その演奏活動が、作曲家・演奏家としての自らの宣伝や、特に地方都市における音楽文化の振興に加えて、自作の演奏解釈の規範を示すという明確な意図に貫かれていたと指摘する。

本論文の中心をなす第 4 章では、タッチ、ダイナミクス、テンポ、リズム、感情表現といった観点から、レーガーの演奏スタイルが再構築されてゆく。著者は、レーガーの演奏に言及した 457 におよぶコンサート・レビュー（演奏会批評）を、批評家の美的立場に留意しながら精査するとともに、本人や知人・共演者の証言、自作の楽譜に書き込まれた演奏指示、さらにはレーガー自身の演奏を記録したピアノロールの録音といった、他の有用な資料も参照することによって、高い客観性を保ちながらレーガーの演奏ス

タイトルの全体像を描き出すことに成功している。

著者の分析によれば、レーガーのピアノ演奏の特徴として、構成やフレージング、対位法の処理に関する明確さや、歌を思わせる持続力のある音が挙げられるが、特筆すべきは陰影に富んだ繊細な表現へのこだわりである。それを可能にしているのは、際立って柔らかいタッチであり、極端ともいえるほどのピアノ・ニッシモの多用、そして柔軟なテンポ感覚（曲中での急激なテンポの変化やテンポ・ルバートの多用）である。レーガーのそうした嗜好は、自作の譜面に事細かに書き込まれたダイナミクスやテンポの指示からも読み取ることができる。もっとも、現存するレーガーの演奏（ピアノロール録音）を聴くと、必ずしも譜面上の指示には従っておらず、少なくとも自作に関しては、実際には状況や気分に応じて自由な演奏を行っていたと推察される。

以上のような特徴から、レーガーのピアノ演奏が、20 世紀に次第に主流となる「楽譜に忠実な」演奏スタイルとは一線を画しており、むしろリスト派やレシェティツキ派といった、19 世紀後半以来のロマン主義的な演奏解釈の系譜に連なっていると著者は結論付ける。また、生前は国際的な名声を誇ったレーガーが死後急速に忘れられてゆく要因を、演奏史におけるレーガーのそうした位置に求める指摘も興味深い。いずれにせよ、本論文によって明らかになったレーガーの演奏スタイルは、歴史主義的な立場からそれに忠実に従うにせよ、現代的な視座から一定の距離を取るにせよ、彼の作品をより説得力を持って解釈、演奏するための鍵となるだろう。

冒頭でも指摘した通り、本論文はこれまでほとんど注目されてこなかったピアニストとしてのレーガーに光を当て、その演奏スタイルを具体的に明らかにしたという点で高い学術的意義を有しており、今後レーガーの作品に取り組もうとするピアニストにとっても有益な指針となるだろう。また、重要なレビューについては、当該コンサートの日時、場所、演奏曲目も明示したうえで丁寧に訳出されているため、資料的価値も高い。予備審査の際に指摘された問題点もすべて修正されているため、論文審査および口述試験を審査員全員一致で合格と判定した。